



校長室だより 23号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】
未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

- 1 「振徳についていま思うこと」 第5代校長 横溝正巳 20周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話 日清食品「カップヌードルミニ」開発秘話『致知』2010年10月号より抜粋

「振徳についていま思うこと」(原文) 第5代校長 横 溝 正 巳

私はいま延岡市の旭ゼミナールというところに勤務しております。5月中旬に校長先生から創立20周年記念誌の原稿依頼がありました。初代筒井校長先生が確か昭和56年1月10日、ご自分のご誕生日に都城商業高校校長として在職中に、現職のままで御亡くなりになりましたが、その当時のことが思い出されます。

私が日南振徳にお世話になりましたのは、昭和58年4月から60年3月までの2年間でありました。三雲校長先生が、ご退職になるということで、その後任として私が赴任したのであります。

4月1日に主任の発令がありますので、3月31日に日南に入ったのであります。宮崎を出るときから小雨は降っていましたが、油津についたとたんに、ものすごい集中豪雨にあい、山形屋の前で20分位動けませんでした。私が日南に来ることを大歓迎してくれているようでした。学校の紹介で、北郷温泉に一泊致しました。

学校では谷口教頭先生をはじめ、半分ぐらいの先生は顔見知りでしたし、立派な方ばかりでしたので心強いかりでした。生徒諸君も開校当時の伝統で、よその学校ではとても考えられないほど立派な礼儀正しい振る舞いと、挨拶のできる生徒ばかりで、このよき伝統はけっして絶やしてはならないと思い、しっかり指導してまいりました。今もこの伝統は守られているものと思っています。あと10年とちょっとで21世紀になります。そのころ在校生の皆さんは、社会人として大いに活躍しておられることと思います。

現代の1年は江戸時代の150年にも匹敵すると言われています。それほど現代の科学技術の進歩は目覚ましいものがあるようです。そのすべての知識や技能を身につけ、落ちなく習得することはとても出来るものではありません。したがってその基本と思われる知識技能を習得することによって、それに関係するものに、移転し、応用のきくようにしなければならないと思います。そこで生涯教育という問題も生まれてくるのです。

皆さんが学校で勉強する期間よりも、数倍も長い期間つまり一生死ぬまで勉強し続けなければならないのだらうと思います。皆さんが学校で習得したことは、そのすべてが基礎基本であります。今一生懸命に勉強することが、将来栄光をもたらすことにつながると思います。

遠い県北の空から、日南振徳商業高等学校の益々のご発展と在校生、卒業生諸君の今後のご努力を祈念致します。

出逢ったいい話 『仕事は人生観に比例する』

カップヌードルミニ開発秘話 日清食品元取締役マーケティング部長 久保龍太郎さんのお話です。

日清食品に入社して5年目のことである。常務との話の最中、「君、“適所適材”になれ」と言われた私は、とっさに「え？適材適所、ではないでしょうか」と聞き返した。するとこんな言葉が返ってきたのである。「君は何の“適材”や。バット1本、絵筆1本で飯が食えるのか？食えんからウチの会社に来たんだらう。君はまだ入社して5年目だから、これからいろんな所へ行かされる。

どこへ行っても自分の与えられた所、そこを“適所”とせよ。そしてその“適材”となれ」その後、私は商品開発やマーケティングを中心にいろいろな職務を経験したが、どこへ行こうが、この「適所適材」が脳裏に焼きつき、決して離れることはなかった。私のビジネス人生を支えた言葉の一つである。

日清食品に入社したのは昭和38年のことだった。当時は年商20数億円規模の

小さな会社だったが「ひょっとしたら将来化けるかもしれんぞ」という恩師の勧めを受け、その可能性に懸けてみることにした。

創業者の安藤百福さんが社長として辣腕を振るわれていた頃だった。ところが会社に入った翌年、当社で販売していた製品から中毒事件が発生してしまったのである。我々営業社員は、保健所やお客様の元を走り回りながら対応に追われていたが、ある日、そのことが新聞に大々的に報じられてしまった。出社した我々は悲痛な面持ちで今後の身の振り方などを話し合っていたが、社長室の扉が突然開いたかと思うと、「皆、集まれ」と号令が掛かった。

創業者は会議室の椅子にドンと腰掛けると、落ち着いた声でこう言われた。「皆も知っていると思うが、今朝こういう事態が起こった。しかし、何一つ心配することはない。いままでどおりにやってくれ」そして何食わぬ顔で社長室へと戻ってしまわれたのである。その言葉を聞いただけで、我々は皆ほっと胸を撫で下ろし、これでもう大丈夫だという安堵感が広がった。その後も会社には様々な問題が起こったが、創業者はどんな困難に遭おうがビクともされない。これこそ、上に立つ人が持つべき心構えであり、姿勢であると言えるだろう。

自分自身が部下を持つようになったのは30代半ばの頃だが、大勢の部下と接する中で、ある疑問が私の頭をもたげてきた。仕事に対する姿勢や成果の差は一体何によって生まれるのか。当時は血液型での性格診断が流行していたため、そんなものかとも考えたが、同じA型の部下であっても千差万別である。つまり血液型とは何の関係もない。しばらくたって、自分なりに出した結論は、その人の持つ「人生観」ではないかということだった。

要するに、自分の人生に生きる目的や価値観を持っているかどうか。その人生観を確立している人は、決まってよい仕事をする。

そして仕事に対する姿勢、そこで得られる成果というものは、その人が持つ人生観と比例するのではないかと思えてきた。私がビジネスマンにとって何より大事だと思うのは、会社における自分の存在意義と、社内での位置づけを知ること、そして会社にどれだけの損益をもたらしているか、という三つの視点を持つことである。

私自身も数多くの失敗をし、会社に及ぼしてしまった損害も少なくないが、これだけは貢献したといえる仕事がある。昭和56年に他社に先駆けて開発した「カップヌードルミニ」である。商品開発においては「着眼」というものが重要になってくるが、このカップヌードルミニもまさに着眼から生まれたものだった。

当時、ある会社が発売したビールのミニ缶が、駅の売店で売られていた。それを若い女性がぐっと飲み干す姿を見て、なるほど、カップヌードルのミニがあってもよいな、と考えたのが初めの着想だった。

さらに数日後、ある女子社員が、昼休みのたびにチキンラーメンを紙カップに入れて食堂へ行くのが気になった。何をしに行くのかと見てみると、お湯を注いでスープ代わりにしている。なるほど、これは商品になるな。カップヌードルミニでいこう。

ミニヌードルという新たな市場を開拓したこの商品は、現在も利益の取れる定番商品となっている。その後、私のアイデアがもとで発売された「日清マグヌードル」もまた然りである。ただし、こうした着眼は、四六時中その商品のことを考え続けていなければ得られない。だからこそ私は、仕事と人生観は比例すると考えるのである。着眼の母体は人生観にあり、とも言えるかもしれない。

冒頭に述べた「適所適材」とともに、私の人生観を形づくってくれた言葉がもう一つある。福沢諭吉の伝記に出てくる「人生須有也痕（じんせいすべからくあとあるべし）」である。

諭吉は慶應の塾生たちに講義を行っていたある時、東京湾に行く船を見ながらこう語り掛ける。「大きな船には大きな航跡がある。小さな船にも小さな航跡がある。

君たちはこれからそれぞれの道を進んでいくが、実業の道へ行こうが、学問の道へ行こうが、日本のために足跡を残せ——」

私はこの言葉を心中深く刻み込み、商品開発やCM製作などを行う時、これは社史に残るか残らないか、世の中に残るか残らないか、といった問い掛けを絶えず行っていた。よい仕事をするためには、人生観を確立することがまず必要である。できればそれを、35歳までには持ったほうが良いというのが私自身の実感である。